

天気予報

日本で天気予報を発表している会社は大きく分けて4社です。

気象庁、気象協会、ウェザーニューズ、ウェザーマップです。

4社の的中率は、気象庁は84%、ウェザーマップが83.1%、気象協会が82.4%、ウェザーニューズが81.7%でした。

期間は2019年の6月から8月です。

ただ、これは、気象庁の天気予報の検証ルールに当てはめた場合です。

天気予報の的中率

過去50年間の天気予報の的中率は、東京地方の天気予報を例にして、

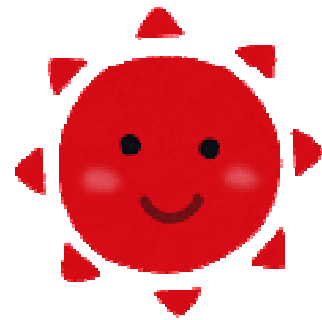
「翌日雨が降るかどうか」の予報の

中率を調べてみると次のような結果になります。

- 1950年： 的中率約72%
- 1975年： 的中率約79%
- 2000年： 的中率約84%
- 2006年： 的中率約86% (いずれも過去5年平均値。気象庁調べ)

2000年には的中率は84%と12ポイントも改善しています。2006年にはさらに86%にまで上昇しています。

ただし、この的中率が高いか低いかは見方が分かれるところです。86%の数字自体は確かに高いようですが、それでも100回予想し



たら14回は外れていることとなります。

最近では人工衛星を使った宇宙からの観測体制が整い、気象変動の解析もスーパーコンピュータの何百倍も能力がある地球シミュレータで行われる時代になりました。

最近では、その地球シミュレータさえ旧式になって、さらに高能力の新型コンピュータが解析に使われています。

ただ、それでも明日の天気予報が14%も外れるのだと・・・

まあ、そのようにお考えください。

危険な雨

「線状降水帯」と「ゲリラ豪雨」の違い。

最近、集中豪雨のニュースで「線状降水帯」という言葉も目にします。強い雨といえば「ゲリラ豪雨」を思い浮かべますが、「ゲリラ豪雨」とは違う現象なのでしょうか？

「線状降水帯」は「ゲリラ豪雨」をもたらす「積乱雲」が連なることで形成されます。ひとつの積乱雲は30分～1時間程度と寿命が短く、降らせる雨も数十ミリ程度です。線状降水帯は、次々と発達する積乱雲が同じような地域を通過することでできる線状の雨域や雨雲のまとまりのことで、狭い範囲で強い雨が長時間にわたって降り続き、雨量が100mm～数百mmに及ぶ「集中豪雨」をもたらすことがあります。そのため線状降水帯は大きな災害をもたらす危険性があります。線状降水帯は「ゲリラ豪雨」がずっと続くイメージです。ゲリラ豪雨は、2022年7～9月のゲリラ豪雨は、全国でおよそ90,000回発生する予想です。発生総数はおおよそ60,000回発生した昨年と比べると1.4倍、過去5年平均と比べると1.9倍で、今年にはゲリラ豪雨の発生が多くなる見込みです。



危険な雷

日本での落雷による死亡

日本での年間の落雷被害者数は平均約20人で、そのうち死亡者数が約13人。

死亡率は約70%です。

落雷に当たる確率は100万分の1とされ、世界での年間被害者数は1000人ほどですが、死亡率は約30%で、日本の落雷死亡率は世界的に見てもかなり高いといえます。

日本での死亡率が高い理由として、一般に雷から身を守るための知識があまり浸透していない点が上げられます。

落雷の死亡率を下げる行動・上げる行動

落雷が起きたとき、どのような行動をとるかによっても死亡率は変わってきます。

落雷による死亡率を上げる行動には、落雷時、開けた場所や木の傍にいたことが挙げられます。

雷は高いところに落ちやすいので、周りになにもないところでは自分に落ちる可能性が高くなります。

また、木の近くは側撃を受ける可能性が高く、雷雨のときに木の下で雨宿りするの危険です。

逆に死亡率を下げる避難場所としては、建物や車の中のほか、4m～20mの高さの物体から4m以上離れた場所で頂点から地面までの45°のラインの内側は保護範囲といわれ、ほぼ安全な場所です。金属製品を身につけていると落雷に遭いやすいというのは誤解で、現在では、身につけた金属製品には、人体を流れる電流値を減らす一定の効果があることが確かめられています。逆に身につけた長靴やレインコートなどのゴム製品に安全効果があるというのは誤った認識です。雷の高電圧に対し、ゴム製品の絶縁効果は皆無であることが確認されています。

